言葉の力（上）

高橋達明

はじめに

C. M. バウラは1962年刊の『原始歌謡』で，言葉の技芸の後期旧石器時代におけるはじまりについて光を投じるべく，いずれも狩猟採集民である（あるいは，であった）[1]，ピグミー，ブッシュマン，ダマラ（南西アフリカ），セマン（マレー半島），ヴェッダ（セイロン），アンダマン諸島民，アボリジニ，エスキモー，オナ（ティエラ・デル・フェゴ島），ヤーガン（同左）の歌謡を素材として洞察ある分析をこころみたが（Bowra, 1962），その先駆的な論述のうちには，たとえば，儀礼歌をふくめて，歌謡に作者を想定すること，いいかえれば，Volksgeist や common consciousness の排除に意味を認めていること，また，舞踊と儀礼が歌謡に先行すると見ることなど，重要な点で，いずれ反証はかなわぬにせよ，にわかに従いがたいところがある[2]。しかし，この本で何より目につくのは，言語そのものの分析がまったくなされていないことである。むろん，上にあげた部族の言語にすべて通じることは誰しもまずできないから，信頼できる翻訳にたよって当然で（バウラは英独仏の研究文献を使用し，テキストの引用はすべて英訳による），筆者はそれをいうのではなく，もし詩という言葉のある種の組み合わせの形式の発生と展開を発展史的にもとめようとするなら，まず，人類が言葉の機能をどうとらえてきたか，そのはじまりのところを狩猟採集民の歌謡にうかがわなくてはならず，それには，logosphère（言語界）の個別的かつ全般的な把握が必要になるということである。といっても，言語哲学の類をただちに要請するのではなく，その基礎として，むしろ，言語の類型論的研究の有効性に注目したい。類型論は，グリーン

バーグの言語普遍性の提言の日付が示すように（Greenberg, 1963），1960年代に，新たな衣装をまとって，ふたたび言語学の水面に躍りあがってきた潮流であり（Ramat, 1999），以来，グリーンバーグ流の類型論とは方法と目的を異にするけれども，焦点の一つを能格言語あるいは能格現象の研究に据えて，急速な進展を示している（柴谷・角田，1982）。他方，ロシアでは，それとは別の文脈で，能格言語およびそれからさらにすすんで，活格構造言語 язык активного строя の解明を課題とする内容的類型学も進展している（山口，1995）。筆者は言語学を専攻する者ではないが，本論では，詩の言葉の普遍的な力のありかを考えてみるにあたって，類型論的研究にいささか踏みこまざるをえないので，識者の指正をお願いしたい。

I

話の緒に，まず，『おくのほそ道』に出る，人口に膾炙した句，

荒海や佐渡によこたふ天河

をとりあげる。この句は「銀河ノ序」にも出，真蹟懐紙も残る由で（『校本芭蕉全集』第六巻），一般に出雲崎での作とされるが，制作の日付，その夜の天候，旧暦七月の銀河の地理的方向，等々，詩的虚構をめぐって，種々の議論があった。それに関連して，横たふという語法についても，今に至るまで諸説がある（堀切，2003）。横たふは横にするという意の他動詞で，自動詞（横たはる）ではない。そこから，1）文法上の誤り，2）語法上の破格，3）漢文の訓読にならった，自動詞としての用法，4）再帰（反射）動詞説（自分を横たえる＝横たわる）といった説が生まれた。4は金田一京助が早くに説いたもの（1940）。山本健吉（1959），安東次男（1996）もその説をとる。山本は著書のあとがきにも横たふをとりあげて，芭蕉がこの動詞を再帰的に用いたことの意味を，芭蕉のいわゆる「俗談平語を正す」ということが，単に正すという以上に，「日本語の可能性の拡充」となるところに見出している。なるほど再帰動

詞説はおもしろいが，このような説が考案されるのも，つまりは，天の川が佐渡に横たわっているという，言語外現実を前提とした読みに立つからで，その点では1から3までの説に同じである[3]。荻原井泉水（1956）の非写生の説に立つ他動詞説もあるが，これも，芭蕉の主観が天の川を横たえるという読みにすぎない。詩はあくまで言葉の組み合わせであり，そう徹底するなら，自動詞の説は，再帰動詞説，他動詞説をふくめて，横たふ，天の川，の読みを言語外現実に置くのではなく，言葉の組み合わせの中で立てるべきである。しかし，これはなかなかの難問である。筆者もここではたと行きづまり，年来，句を舌頭に転じ，心裏に通わせて，ようやく，みずから納得しうる解を得ることができたと思う。それは，横たふは自動詞でもなく，他動詞でもない，すなわち，自他未分であるという解である。句の天の川は格助詞をもたない。自動詞の主語にもなれば，他動詞の目的語にもなる。他動詞とすれば，別に主語がいる。にもかかわらず，一見したところ，それがない。それは，主語が言葉の組み合わせの深みに隠れているからである。端的に表面に引き出せば，荒海や，（それが）佐渡に天の川を横たえる，ということになる[4]。この非人称の主語は何か。それは造化の力である[5]。造化の荒ぶる力が天の川を佐渡に横たえる。それは，ただちに，天の川が横たわること。天の川がいま佐渡に横たわっているのは，造化の隠れた力の働きによって横たえられるからである，という，その運動に，詩人の直覚がある。芭蕉は造化の力の直覚を横たふの一語に託した。ある時は切れ字に隠れ，ある時はそこから顕れる主語の働きが生み出している意味の含み，その含みが自他未分の動詞の内実であり，横たふの内実である。

そこで思い出されるのは，頴原退蔵（1949）が語法上の破格を指摘しつつ，芭蕉が横たふと詠んだのは，語法や修辞を考えた結果ではなく，佐渡に横たふと思わずにおれない感銘があったからで，これは一箇の詩境であると述べていたことである。詩境というのも，曖昧な表現にはちがいないが，これを『三冊子』が伝える芭蕉の言葉でいえば，「松の事は松に習へ，竹の事は竹に習へと師の詞のありしも，私意をはなれよといふ事也〔中略〕習へといふは，物に入てその微の顕れて情感るや，句と成る所也」（『校本全集』七）というところ

に相当するだろう。荒海やの句の場合，物の微と私意をはなれた情が切り結ぶ交点に位置するのは，横たふという一語の動詞であった。ということは，横たふは対象的に把握された言葉ではなく，生きられた経験であったということである。

芭蕉の言語意識は横たふの働きを明らかに直覚していた。というのは，奥の細道の旅からいえば，四年後，元禄六年四月廿九日付荊口宛の書翰に，次のような文章が見えるからである（『校本全集』八）。なお，これは元禄八年刊の『笈日記』におさめられた。

〔前略〕水邊のほとゝぎすとて更ニすゝむるにまかせて，与風存寄候句，

ほとゝぎす聲横ふや歟や横ふ水の上

と申候に，又同じ心ニて，

一聲の江に横ふやほとゝぎす

水光接天白露横江の字，横，句眼なるべしや。ふたつの作いづれにやと推稿難定處，水沼氏沾德と云もの吊來れるに，かれ物定のはかせとなれと，両句評を乞。沾曰，横江の句，文ニ對ノ考之時ハ句量いミじかるべければ，江の字秋て水の上とくつろげたる句のにほひよろしき方ニおもひ付べきの条申出候。免角する内，山口素堂・原安適など詩哥のすきもの共入來りて，水上の究よろしきニ定りて事やミぬ。させる事なき句ながら，白露横江と云奇文を味合て御覧可被下候。〔後略〕

沾德の判については，許六の「俗誹の耳にはよろこぶ所也」云々の反論（『篇突』，『俳諧問答』，古典俳文学体系十，所収）もあり，それに対する去来の反論（『旅寝論』同）もあったりして，両句の優劣はいまなお甲論乙駁のように見受けられるけれども（山本，1959），まず注意すべき点は，芭蕉が白露横江を通例のハクロエニヨコタハリ（『諸儒箋解古文眞寶後集』巻之上，元禄七年，江戸日本橋書林山口屋權兵衛板の振り仮名による）の読み下しではなく，1）白露江ニ横タフと読み下すほうに，言葉の詩的な働きをみとめていたこと，し

たがって，2）たとえ，横タフの自動詞としての用例が漢文の訓読その他にすでに見られるとしても（久富，1980），その用法に唯々諾々と従っているのではないこと，いいかえれば，3）本来なら自動詞をもちいるべきところに，他動詞を当てるとき，言葉の思いがけぬ地平が開けてくるのを鋭く意識していたことである。というのも，白露横江を「奇文」といえるのは，明らかに，横タフと読むからで，横タハルでは奇と評するほどの力が生まれてこないからである。その言語意識は「横，句眼なるべしや」という文にも現れている。横の句眼は単に東坡の文のみならず，というよりむしろ，芭蕉の句にこそ働いているとしなければならない。芭蕉は一句を，郭公聲横たふや水の上，と定めるが（元禄七年刊『藤の實』初出），沾徳に従ったわけではない。句の主眼が，声横たふという語法に，すなわち，声を横たふと声が横たふを一つにまとめた，動詞の自他未分の語法にあることはやはり動かないからである。声を横たえるのは，なるほど，ホトトギスにはちがいないが，それは意志的な行為というより，止ムヲ得ズシテ，思ワズモ，声ヲアゲルということで，ホトトギスはいわば「自他未分」の境地にある。ホトトギスをして声をあげさせるのは，ある大きな力であるといってもよい。その含みが「横」にある。露伴はさすがに，「横たふが入神のところである」と簡明に述べている（幸田，1956）。ところが，試された弟子は「横」の言語意識がないことを暴露した。「江の字秋て水の上」は，見当外れとはいわぬにしても，ともかく第一義的ではない。弟子たちがそれを知ってか，知らぬふりをしてか，妙な議論をいつまでも続けているのをもし耳にしたとすれば，芭蕉は思わず苦笑を洩らすにちがいない。もっとも，この句は初案の声や横たふの切れ字を声横たふやに移してなお，切れのぐあいが弱い。水には，江がそなえている幅がない。つまり，岸という区切りがない。区切りがないので，折角横たえたはずの声が水に落ちてゆく。許六が，水の上は「いろえ結び〔綺結〕にて連続也」（『篇突』，鉤括弧内，筆者）と評したのは当たっている。しかし，そんなことは，芭蕉は先刻承知していた。「させる事なき句」という文言は謙辞ではない。それにもかかわらず，一聲の江に横ふやほとゝぎす，を捨てたのは，主眼である，動詞の奇の働きを無にしかね

ない「の」の痩せを嫌ったからである。ついでながら，横たふの自動詞としての用法が当時の俳諧にあったことを示すために，この句を例証とするのは，少なくともこの語例にかぎっては，本末転倒といわねばならない。以上を要するところ，「させる事なき句ながら，白露横江と云奇文味合て御覧可被下候」ということになる。

言語活動は，一般に，言語意識に先行する。詩人の直覚もまたそうで，言語意識がいつも遅れてやって来る，とは必ずしも断言できないが，この横たふの場合には，それが真相ではないか。荒海やの句の制作に際して，「前赤壁賦」の二句が芭蕉の頭にあったことは，水光を星暉に逆転して，二句を一句にまとめた手法から十分に推察できる[6]。しかし，芭蕉がこの句のそなえる言葉の力を自他に説き明かしえたのは，四年ののち，ほとゝぎすの句を推敲する過程においてであった。書簡の文の匂いにはどうもそのあたりの消息が漂っているように思われる。

では，荒海や佐渡によこたふ天河という句は，何を伝えようとするのだろうか。それは，すでにふれたように，造化の隠れた力の働きである。荒ぶる海にいま具現している生成の力，それが，夜天にきらめく光の帯を，沖合遠い佐渡の黒い影へ，横たえるように働くと，銀河は，ただちに，流れるごとく，暗く息づいている島に，風が凪ぐように，低く，横たわってゆく。狂瀾怒濤と天体の運行。荒波が轟き，風が鳴り，光が軋むようにきらめく。地と宇宙の全運動を宰領しているものこそ，造化である。その厳粛な力の歩武堂々としたリズムは荒海と佐渡と天の川の語頭音のアソナンスに写されて，詩的空間に反響している。アソナンスはさらにア音とオ音にこだまして，ことさら重い。しかも，そこには，無限に深い静謐がある。芭蕉がこの句をなしえたのは，造化の力の働きにともなって起こる，重く広がる，力動的な響き，しかも，一つの沈黙である，あの響きを，一瞬，荒ぶる波に聞きとめたからである。このとき，詩は沈黙の一瞬の響きを鋳造した言葉である。

筆者は少なくとも．この句に，雄渾な風景描写を見たり，旅愁を持ちこんだり，七夕の説話や佐渡の流人哀史といった人事の連想を読みこんだりしようと

は思わない（加藤，1975）。句を支配しているのは，あくまでも，非情の厳しさである。美しい風景も雄渾ならぬ風景も，流人も七夕の行事にはしゃいでいる頑是なき幼児も，すべては威厳ある非情に包みこまれている。しかも，それらがこの包みの中で占める部分はなきに等しいものにすぎない。万物は生成の運動の中にある。ささやかな生命もまた動きである。動きであることにおいて創発的である生命が万物の運動を観照するとき，ちょうど鳥の声が大気を震わせるように，小さな一つの動きが生命にさらに加えられる。意味の波動は沈黙となって響く。無限に深い静謐がここにあるのは，そのゆえである。そんなことならとっくにわかっていると人はいうかもしれない。しかし，感慨を言葉になおすという簡単なことがいまの問題ではない。もっとも大切であり，もっとも困難であるのは，轟く波に，一瞬，沈黙の響きを聞きとめることだ，いや，何にもまして，その修練であると芭蕉は応じるにちがいない。

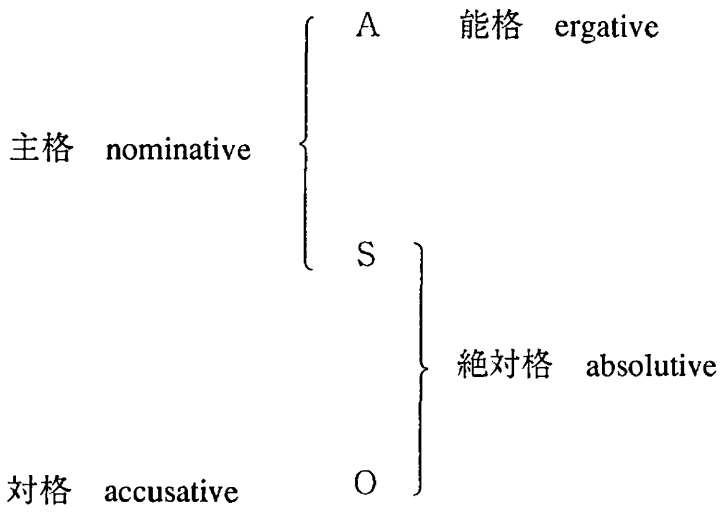
詩は現実にではなく，もう一つの現実に属している。詩作という行為は現実に何ものかを加えるが，詩は現実の一項目ではない。このもう一つの現実を具現する言葉が real であるのは，事物の配置と連関の思いがけぬ経験を担っているからである。その言葉を人類の言語の歴史的な過程の展望の中に置けば，さて，何が見えてくるか。

II

R. M. W. ディクソンが『能格性』の序文に，ergative という語はオーストラリアに渡ってジルバル語の研究をはじめた1963年の当時，自分の語彙にはなかったと書いているのは興味深い（Dixon, 1994 : xiii）。能格はドイツのコーカサス言語学者 A. Dirr がギリシア語の *ἔργον*（Eng. *work*）から作ったもので（1912），印欧祖語の推定形 *werg-（*to do*）は英語の work と同じ語根を含んでいる。いわゆる能格現象は19世紀中葉以来バスク語，コーカサス諸語，等々の研究によってしだいに明らかにされ，さらに，オランダのウーレンベックなど，一部の学者は印欧語の格標示の特異性に着目して，前印欧語 Vorindogermanisch を能格言語と見る方向に研究を進めつつあったが[7]，それらに

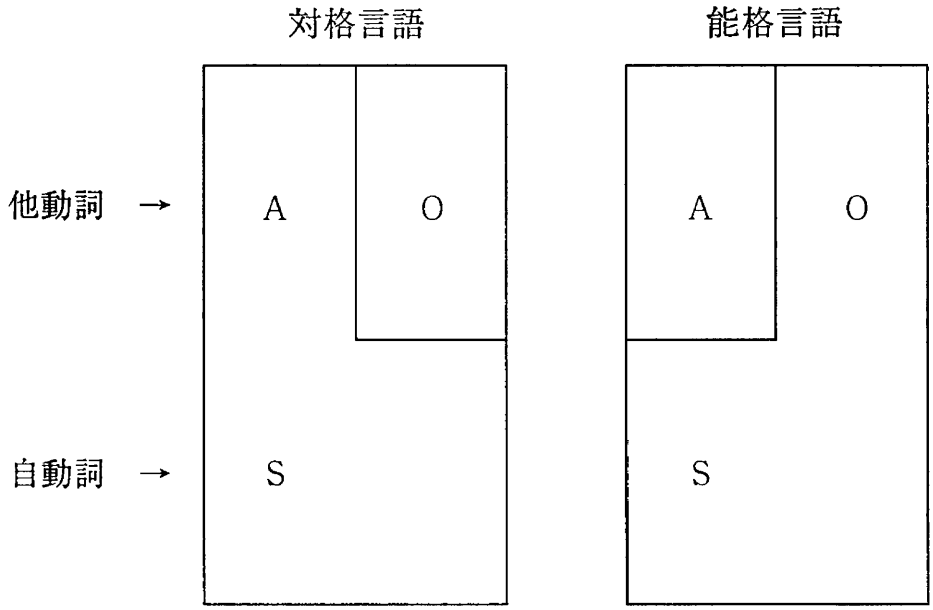
おいては能動格 aktivus その他，さまざまな用語がもちいられていた（Seely, 1977：192–194. 松本，1988b：3)。他方，ロシアでは1950年代から能格性の解釈をめぐって，いわゆる能動—受動論争が注目を集めていたというから，イギリスの学界は，若年の研究者が ergative を知らなくてすむような状況にあったらしい[8)]。ディクソンがジルバル語の能格性に注意するのは二度目のフィールドワークからで，その成果は評価の高い例のモノグラフに発表された（Dixon, 1972)。それが一つのきっかけとなって，後述の M. Silverstein の名詞句階層の論文（1976)，B. Comrie（1978)，ディクソンの論文（1979）と『オーストラリアの諸言語』（1980）というぐあいに，能格性の新たな研究が短期間に目ざましく進展し，拡大していった。その様子は『能格性』の序文に略述されている。この書は，著者が南米インディアン諸語の調査をへて，ひとまず総括した，世界の諸言語の能格性の諸タイプについての survey である。以下，これによって能格現象を瞥見してみる。

ディクソンの理論的基礎は「S，A，Oという普遍的な統語関係を原始要素 primitives とみなし，それらによって形態論的な標示と統語論的な操作とのシステムを記述する」（Dixon, 1994：xvi）ことである[9)]。そこで，まず，前者の形態論的現象について要点をうかがうなら，上のS＝自動詞の主語，A＝他動詞の主語とO＝他動詞の目的語は，それぞれ関係する動詞の意味論的な指



示に従って，文の項を構成するが，この時，格標示は一般的に前頁の図のようになる。形態論的な能格性は標識詞（不変化詞，接置詞），また動詞に付される接辞の相互照応によって標示する言語もあるが，ここでは話を単純にするために，格屈折に限定する。

すなわち，左の主格—対格言語（以下，対格言語）では，主格はA＝Sで，一般的に無標であり，対格が有標であるのに対して，右の絶対格—能格言語（以下，能格言語）では，絶対格はS＝Oで，一般的に無標であり，能格が有標である。これをまとめれば，次の図のようになる。



能格型の格標示について，ディクソンがあげるジルバル語の文例を引用すれば，

(1) *ŋuma* *banaga-nᵛu*
父＋ABS 戻る-NONFUT（非未来）
父は戻った

(2) *yabu* *banaga-nᵛu*
母＋ABS
母は戻った

(3) *ŋuma* *yabu-ŋgu* *bura-n*

父＋ABS 母-ERG 見る-NONFUT

母は父を見た

(4) *yabu* *ŋuma-ŋgu* *bura-n*

母＋ABS 父-ERG

父は母を見た

ジルバル語の動詞はS，A，Oのいずれとも人称，数の照応をせず，時制をしめすのみで，その時制は無標の現在と過去（＝非未来）と有標の未来の二項式で，前者の活用は，banagay（戻る）のような *-y* stem について *-nʸu* (*-nu*)，bural（見る）のような *-l* stem について *-n* である（Dixon, 1972 : 55)。(1)と(2)で，Sが絶対格をとるのに対して，(3)と(4)のAは能格をとり，Oが絶対格をとる。これが能格型の格組織である。

次に，能格型の統語論的操作について見ると，それは複文の名詞句の文法的関係に現れるもので，ディクソンはこれをS／O軸と呼んで，対格型のS／A軸に対比している。たとえば，(1)と(3)を組み合わせると（andに当たる語はない），

(5) *ŋuma* *banaga-nʸu* *yabu-ŋgu* *bura-n*

父＋ABS 戻る-NONFUT 母-ERG 見る-NONFUT

父は戻った（そして）母は父を見た

父は第一文の自動詞のSであって，第二文では，他動詞のOになっている。(1)と(4)の組み合わせでは，S／O軸を成立させるために，(4)を逆受動 anti-passive の構文に変換しなければならない。すなわち，(4)のAの能格は絶対格に，Oの絶対格は与格に降格される。

(6) *ŋuma* *banaga-nʸu* *bural-ŋa-nʸu* *yabu-gu*

父＋ABS 見る-ANTIPASS-NONFUT 母＋DAT

父は戻った（そして）母を見た

ところで，能格型の格組織をもつ言語でも，統語形式は対格型（S／A軸）をとるものが多い。ジルバル語は稀な例とされるが，そのジルバル語も，代名詞（一人称，二人称）は対格型の活用をする。AとSの主格は無標で，Oの対格が有標になるからである。

(7) *ŋana* *banaga-nʸu*
我々＋NOM
我々は戻った

(8) *nʸurra* *ŋana-na* *bura-n*
君達＋NOM 我々-ACC
君達は我々を見た

これが能格分裂 split-ergative と呼ばれる現象（の一つのケース）である。格組織が名詞では能格型，人称代名詞では対格型と分裂している。能格言語は一般に能格型で一貫しているわけではなく，対格型をもあわせもつ（Comrie, 1978: 350-355)。ディクソンによれば，ジルバル語の格組織の表は次のようである。

	一・二人称代名詞	三人称代名詞	固有名	普通名詞
A	-φ	-ŋgu	-ŋgu	-ŋgu
S	-φ	-φ	-φ	-φ
O	-na	-φ	-φ	-φ

人称代名詞は一，二人称でOを有標とし，対格型であるが，三人称では，Aが有標で，SとOは無標の能格型を示し，以下，名詞についても同じである。

対格と能格のこのような棲み分けに注目し，背後に潜んでいる意味論的な特徴（意味素性）をはじめて明らかにしたのは，前述のシルヴァースティーンの

「素性の階層と能格性」である。この名高い論文は，記述的な部分もジルバル語を含むオーストラリアの諸言語と北米のチヌーク語を実例として，あるにはあるが，分析の技術的部分がきわめて複雑であり，編者のディクソンは発表にあたって making more accessible to the reader と注文をつけたという話だが（Dixon, 1994 : xiv），それでも，少なくとも筆者には理解のとどかぬところが多々ある。表題にいう素性は有生性 animacy あるいは動作主性 agentivity と考えてよく（松本，1986 : 174），シルヴァースティーンの名詞句階層と言うと有生性が頭にすぐ浮かぶが，実際の議論は有生，無生ではなく，人称代名詞の内部の人称と数の階層性に集中している。名詞句階層の図は当然出ているが，引用に適したものではないので，ここには，ディクソンが1979年に改訂した図を引いておく（Dixon, 1979 : 85. これは『能格性』の図に基本的に同じ）。矢印の線の下の説明は筆者による。

一人称代名詞　二人称代名詞　指示・三人称代名詞　固有名詞　普通名詞

人間　有生　無生

←

A＝主格（対格型）　　O＝絶対格（能格型）

Aとしての主格はこの階層の高いほう，左の端から現れて，おおむね中間の指示代名詞，三人称代名詞のあたりで，能格に交替し，能格はAの機能を果たしつつ，右の端に至る。逆にいえば，Oの絶対格は階層の右の端から現れて，途中で，対格と交替し，こちらが左の端に至る。中間がどこに来るかは言語によって異なる。また，その位置には，A，S，Oがそれぞれ異なった標示をうける，三立型 tripartite の組織が現れることも多い。ディクソンはこの格組織の交替を，参与者が通常でない役割に置かれる場合，形態論的に有標になるという原理をもちいて巧みに説明している。

このシルヴァースティーンの名詞句階層は，松本克己の「能格性に関する若干の普遍特性」（1986 : 174）では，普遍性3として定義されているが[10]，こ

の普遍特性は，松本がそこで述べているように，名詞句が談話でトピックになる，そのなりやすさと見ても妥当するなど，格標示だけではなく，文法の多様な領域に説明原理として応用できる。

名詞句にこのような階層性が成立するのは，明らかに，無生の物は動詞の表す行為の動作主たりえず，被動者となりやすいのに対して，有生物のうちの動物は動作主に立ちえ，なかでも，人間はことに動作主になりやすいからである。そこで，無生物が動作主に立つと，能格の標示をうけ，人称代名詞が被動者に置かれると，対格の標示をうけることになる。

大略，以上のごときが，個別言語ごとに複雑をきわめる能格言語の見取り図である[11]。

さて，名詞句階層の成立については，なお，考えておくべきことがある。1）動物も生活のあらゆる局面で動作主として生きている，にもかかわらず，階層の右の低いところに位置するのはなぜか，2）人間を表す普通名詞が固有名詞の右にあるのはなぜか，3）一人称代名詞が階層のもっとも高い左の端に位置するのはなぜか。1については後述とするが，2，3と関連するので要点を押さえておけば，動物は分節言語をもたないからである。次に，まず，この階層が一人称にとっての親疎の関係の表現になっていることに注意したい。それは，一方では，言語による世界の範疇化とその結果としての事物の分類が名詞句階層に反映していることに関係し，もう一方では，言語が獲得されてきたのは人間社会の進化の過程においてであったという事実に関係する[12]。事物の分類が，基準を動作主たりえるか，どうかに置いているのはひとまず明らかだが，それは ethno-science であって，taxonomy ではなく，特定の視点から階層化されており，この階層化が名詞句階層を成立させている。階層化は言語の類型ごとに異なるが，そこには，人間の視点という共通項が言語の進化のある局面で原初的に成立していたはずである。いま人間の視点といったが，同じく人間といっても，たとえば山脈の彼方にいる，異なる言語を話す部族の人間は，こちら側の人間には，まれびとか敵かのいずれかで，自分が属する部族，親族，家族が現実的にまず人間として現れる。逆にいえば，同一の言語を話す集団と

しての部族がまずあって，他の者はようやく人間としてか，非一人間としてか，現れる。人間という範疇の現実的な微妙さは，多くの部族（民族）の自称がそれぞれ人間を意味する言葉になっているのを見ればわかる。また，固有名詞の項には，親族名詞が含まれると一般に考えられているが，そう考えてよいなら，親族は普通名詞に配分されている人間名詞の左に位置することになる。言語そのものは人間という種の自然的形質ではない。血縁集団によって人為的に維持されるほかはない。それは言語の発生以来変わることのない事実である。社会の文化的伝統は言語の伝承によって保証される。家族，親族，部族，人間（＝非一人間）という親疎の関係が社会という場に生まれ，差別原理として機能して，なんら不思議はない。その関係が言語の枠組の中で階層化され，言語の枠組の中に規定された一つの形，それがシルヴァースティーンの名詞句階層である。さらに，一人称代名詞があたかも存在の連鎖の頂点から世界の事物を睥睨しているかのように，もっとも左に位置するのは，言語という行為は一人称をもってなされるほかはないからである。一人称は二人称を前提とするが，逆もまた真。それは，自己と他者はそれぞれ他方の鏡像であるという関係が文法的形式として確立されているからである。一人称と二人称は三人称に異なり，話すという行為の特別な参与者である。すなわち，一人称は二人称に対峙して，三人称（＝非人称）について語る。しかし，この基本的な枠組はただそれだけのことを示しているのではない。かつてE・バンヴニストが鋭く指摘したように，Est ego qui dit ego ということがある（Benveniste, 1966: 260）。一人称のワレ（主語 sujet）は，ワレという主体 sujet を構成する。それは，ただちに，世界がワレを中心とする同心円として構成されることである。世界はワレをめぐる無限数の同心円から成る。それぞれの内部に，有限数のワレを位置をずらして並べれば，それが人間的現実のあるがままの姿である。この姿を本質的に形成しているのは，logosphère の成立という，諸言語の系統発生としては一回限りの原初的事実であると考えられる。シルヴァースティーンの名詞句階層はその姿を言語の分化のある時点で，一本の線におさめたものに他ならない。この線を同心円に描きなおせば，現実はいっそう鮮明な姿を現すで

あろう。

しかし，人間的現実は歴史の過程の中で現実化されるほかはない。ということは，ワレの同心円がもたらす多様な文法的現象もまた歴史的事実であることを意味する。その事実が注目されるとき，対格言語，能格言語の彼方に，新しい言語類型を構想するという大胆な思考が生まれてくる。すなわち，活格言語の仮説であり，そこから，類別構造 class structure を切り口としてより古い言語構造，類別類型，さらに，中立類型が仮定されるに至っている。そのような構想が可能になったのは，個別言語の歴史的過程の背後に，E・サピアのいう drift (Sapir, 1921 : 122) に類する法則的な力を見抜くことによってであった。

(mars-juillet 2004)

註

1）狩猟採集民 hunter-gatherers という人類学の観念あるいはカテゴリーが担っている歴史的な意味—農耕・牧畜の生業としての定着と同時にはじまる，野生と文化の二元論，それを手段とする，文化の側のアイデンティティの確立の要求，野生のイメージが，文明の段階に達したヨーロッパの近代的思考の嫡子である植民地主義の支配原理において果してきた心理的役割—とその捉え返し，および狩猟採集民の現状については，スチュアートヘンリ（2003）所収の諸編を参照。バウラが狩猟採集民に対して伝統主義的な立場にあることは著作の年代，*primitive peoples* という呼称，「現代の primitives は旧石器時代の祖先の暮らしを続けている。彼らの歌謡はまさに農耕と家畜の飼養に先立つ石器時代の歌謡である」(Bowra, 1962 : 266) という行文，その他から容易に推測されるが，かといって，「カラハリ論争」にいわゆる修正主義は旧石器時代に遡る時間の展望をもっていないと考えられるので，詩の起源を発展史的（進化論的）に考察しようとすれば，修正主義を越えてなお，歴史を構成しうるという作業仮説に立たざるをえないと筆者は考える。それは単に伝統主義に立ちもどることではない。たとえば，アボリジニでさえ，考古学的に想定される三万年という時間の中で完全に孤立していたのではなく，トレス海峡を介して外部世界と接触を保っていたとされる (R.M. & C.H.Berndt, 1992 : 1)。歴史がそのような推定を通時的に構成した表象であることはいうまでもない。

2）バウラは原始歌謡を sacred song と secular song に分け，前者が後者よりも古いとは必ずしもいえないと主張するが，それは，一つには，歌謡に作者を想定するという立場を保証するためであろう。sacred song に作者をふりあてることは secular song の場合よりもむずかしいからである。この想定は，直線的な発展史

の視点からは，確かに意味があるかもしれないが，肯綮に当たっているか，なお考えてみる必要がある。たとえば，ストレーロウの『中央オーストラリアの歌謡』，これはアランダ族の歌謡のテキストを多年にわたって多数収集し，音楽，詩法，文学，さらに伝統社会と宗教儀礼の文書として多面的に解明することを目指した，ディクソンが seminal study (Dixon, 2002: 91) と評する大作であるが，その第Ⅲ部第1節「"primitive" な詩歌の "primitive" な共同体における重要性」は，歌謡の暗唱による「所有」がかつては人生の最高の目的であり，その理由は，1）歌謡が舞踊，演技，芸術とともに宗教と宗教的テーマに分かちがたく結ばれていたこと，2）トーテム祖先がある個人に生まれ変わるというトーテミズムの転生の教義が歌謡の魔術的な力の発現にかかわっていたことであり，だから「歌謡は人間ではなく，トーテム祖先によって作られた」と信じられていたと述べている (Strehlow, 1971: 241-253)。アランダ族の場合，sacred song は，儀礼および祖先の身体であるチューリンガとともに，個人の所有物であり，所有者である長老によってトーテム共同体の選ばれた個人に秘儀的に伝授される（譲渡される）ものである。そこで，まずは，歌謡が起源的に「トーテム祖先」に由来しているという観念をうけとめるべきであろう。この観念は表象としての歴史に参与しているからである。もっとも，バウラはアランダ族の歌謡をおおむねストレーロウの著書と論文 (Strehlow, 1933. 1947. 1950. 1955) から引用しており，「トーテム祖先」説についても，Strehlow (1955) によってすでに知っていた (Bowra, 1962: 39)。したがって，問題はさらに広がるが，筆者の見るところ，要点は歌謡と神話の関係をどう見るかにある。バウラは「神話と象徴」（第九章）で Strehlow (1933) の Ankotarinja（トーテム祖先の一人）の神話を主題とする歌謡を取り上げて，sacred song の象徴主義を論じているが，そこでは，神話の存在が自明の前提になっている。つまり，歌謡の作者は一つの神話から個々の挿話を拾い上げて，歌謡を組み立てるというわけである。Ankotarinja の歌謡は儀礼の仮装劇の演技者の所作に対応する形で歌われるが，一つの場面がおわるごとに，長老が趣旨を参加者に説明するという (Strehlow, 1933: 196)。ストレーロウはこの説明についてそれ以上言及していないが，その趣旨が，すなわち，神話を形成する（そして，神話としての流布を可能にする）内容であると思われる。自明といえば，これこそ自明のことだったのではないだろうか。少なくとも，ストレーロウにとっては。そう考えてよいなら，神話は劇と歌謡の趣旨の説明あるいは解釈にすぎない。起源問題については，はじめに儀礼ありき，ということになる。一定のリズムの支配下にある舞踊，演技，歌謡から，日常言語による語りとしての神話が生まれてくるので，その逆ではない。これを一般化して考えれば，sacred song の成立を一人の作者にもとめることには慎重たらざるをえない。ひるがえって，secular song なら個人を作者として表に立てるということもひとまず簡単で，現に，バウラの引くエスキモーなどの歌謡に

はなるほど個人の即興詩とうけとれるものがあるが，しかし，それらをたとえばギリシア以後，万葉以後の叙情詩と同じとする歴史上の理由があるわけではない。まして，一気に旧石器時代に遡らせることができるとは考えられない。ある場面では伝統主義に立ち，またある場面ではいわば近代主義に立つという矛盾がバウラに見られるように思われる。これはバウラの知らぬこととはいえ，日本文学については，折口信夫の「國文学の發生（第一稿）」（『全集』第一巻）の「神の自敍傳としての原始敍事詩」の主張このかた，文学と文学意識の成立をめぐって議論の蓄積がある。その流れには，金田一京助の『ユーカラ概説』（1942），伊波普猷の「クヮイニャをめぐつて—沖縄文藝史考」（1946），外間守善の『南島文学論』（1995），さらには白川静の万葉研究，詩経研究をも数えることができるだろう。いま誕生間なしの宗教史から古風な表現を借りて手短に述べれば，「神信仰の生成」（ゼェデルブローム）という過程が後期旧石器時代のある時点で澎湃として起こったことを否定する人はいないだろうし，それが，技術と並んで，人類の現在に至るまでの文化に消しがたい刻印を押したこともいうまでもない。文学も例外ではない。「神信仰の生成」は人間の精神の覚醒というまったく新しい局面の展開であり，その局面をおそらく一挙に開いてみせたのは，Homo sapiens のほぼ十六万年と想定される歩みとともに非常にゆっくりと進化し，また分化して，ある閾に達した言語であったと考えられる。ある閾というのは，分化した不定数の言語について，それぞれに一回限りである logosphère の成立を指している。その成立はマリノフスキーのいう Power of Words (Malinowski, 1923: 323) のもっとも原初的な働きであった。以上については，稿が進むとともに，明らかにされるであろう。

3）言語外現実が詩に侵入する力は甚だしく大きい。この句の場合，道具立てが佐渡と天の川だから，なおさらである。正岡子規はこの「句ハタクミモナク疵モナケレド明治ノヤウニ複雑ナ世ノ中ニナツテハコンナ簡単ナ句ニテハ承知スマジ」（『仰臥漫録』）と記している。G. Bonneau が *Anthologie de la poésie japonaise* (1935) に，まさに簡単に，次のように訳しているのも，写生としか見ていないことを示している。

Mer sauvage:
Et là-bas, jusqu'à Sado,
La Voie lactée!

しかし，ロシアの詩人ヴァルラーム・シャラーモフがいうように（Chalamov, *Tout ou rien*, 1993），自然詩は，そのものとしては存在しない。芭蕉の俳論を現代の言葉に置き換えれば，それはおそらく同じことを語るにちがいない。森重敏は「正風への道」というエッセイで（1975：297-311），大略，「もの，ことがあってはじめてそれらに見あう言語がある」とする，「近代言語学以来，万葉集以来など

といわず，おそらく人間の煩悩とともに始まる根深いもの」である「言語記号観」に対して，その「反措定」として，古今集以来，「言語での意味把握によって現実のなまのものごともはじめて真の現実性を得」るという「言語象徴観」が成立し，詩歌の正統の位置につくが，やがて現実を遊離した観念の遊戯に落ちてゆく中で，芭蕉の正風は，もう一度「言語がそこからこそ生れ出てくる」煩悩の源泉に「身をもって殉じ」，その源泉が「おのずから浄化された意味の言語」となるのを待つという行き方であると述べている。これは森重氏ならではの史眼の披瀝であって，まことに示唆的である。ここで言語記号観という独特の呼称を与えられた思想は（なお，ついでながら，筆者の考えでは，言と事が相即する言霊説は言語記号観の一変種である），ヨーロッパの言語思想史では，nomenclaturisme（名称目録主義）あるいは surrogationalism（代用主義）に相当するが，それはプラトンと『創世記』の双方から発して，以後の歴史の底流となった思想であり，1）事物の優先性（事物は名前なしに存在できるが，名前は事物なしに存在できない），2）名前と事物の独立性（名前が何かを変化させることはない。現実は名前がなくてもすでに完全であるから）という二つの思考のもとに成立した（Harris & Taylor, 1989: 38)。いま，言語代用主義の流れをスケッチ風に描けば，それは，たとえば中世の普遍論争，17世紀にはじまる知識論争（primum appellatum 対 primum cognitum）をかろうじて透明な姿のままにくぐり抜けて，カントに至る。批判哲学が認識論の分水嶺であるのはいうまでもないが，それは，言語思想の分水嶺でもあることをただちに意味する。比較文法が19世紀の初頭に誕生するのは偶然ではありえない。言語が近代科学の方法論の対象とされるのと軌を一にして，代用主義は不透明に凝固し，思考の光がすべて言語に吸収されるという状況が出来する。この危機を当時において直覚した人物を二人あげるなら，一人はロマンティスムの詩人ワーズワースであり，もう一人は W. von フンボルトである。ワーズワースはコンディヤックの言語論に親炙したといわれるが（Aarsleff, 1982: 372-381），その言語を触媒とした観念の優先性を説く認識論が詩の言語をいかにして存立させるかという難問を生きた詩人である。フンボルトはカッシーラーのいう批判的言語哲学者であって，やはり，言語が現実を模写するという考え方に明らかな疑問符を付すことからはじめて（Cassirer, 1985: 121-123), Sapir-Whorf Hypothesis の先駆者となった。二人はともに，フンボルトの用語を借りるなら，energeia としての言語という源泉に思いをひそめた人であった。そして，20世紀の初頭，かつて青年文法学派の一員であったソスュールは危機をそっくり裏返しにすることで，体系としての言語の研究の客観性を確保するに至った。それは，すなわち，「言語あっての現実」（森重）という確認であり，言語代用主義という「誤解」の決定的な逆転である（Harris & Taylor, 1989: 188)。一般言語学を立ち上げる，その力業が意味論上のアポリア，solipsismo linguistico を内包することになったのは（De Mauro, 1965: 149-

150. 1967: 33-35)，言語の対象化の帰結として不可避のことであった。しかし，言語は言語学者の専有物ではない。それは，根本において，生きられる経験である。芭蕉であれ，ワーズワースであれ，詩人が言語の危機の直覚において言語学者に先行するのは（芭蕉は国学前期の契沖の同時代人である），むしろ当然のことである。両者のパラレルな危機の自覚のゆえに，芭蕉とワーズワースの対照研究はそれぞれの「自然詩」の読みに資するところが多いにちがいない。むろん，芭蕉は元禄の詩人であって，フランス革命をへた西欧人ではない。それを失念することは許されないが，さらに，「芭蕉とマラルメ」という一見陳腐ながら，思えば，真に興味深い対比がときになされたこともある（たとえば，小林太市郎『芸術の理解のために』1960)。マラルメにも言語の危機との深刻な遭遇があったことはいまやよく知られた事実である。マラルメにとっての新古今集はフロベールと高踏派，あの対象化された言語の精密な集中からなる自足した構造体であった。そうであれば，この象徴主義者のイデア論が対象的言語の招来する無との格闘であったことは容易に了解されるであろう。三人の詩人が経験的にとった方策はそれぞれに異なる。しかし，等しく，詩作は失われた意味をもとめての行であったといってよい。意味は煩悩という場，井筒俊彦（『意識と本質』1983）のいう言語アラヤ識に根ざしているからである。出雲崎の浜に立てば，佐渡は眼前にある。しかし，そう言葉になおすことは意味の手前の写生にすぎない。心の泉はさながらに深い。意味が呼応するのはその深さである。簡単どころの話ではない。

4）この読みと密接に関連するように思われる文法現象の一つは，ロシア語の無主体文である。これは主語を欠く文で，非人称動詞のみならず，人称動詞にも見られ，動詞は常に三人称単数（過去形では中性単数）に立つ（八杉貞利・木村彰一『ロシヤ文法』1953)。山口巌の「ロシア語の類型学的考察」（1998：454-468）がこの非人称の構文を，四つのグループに分けて考察している中で，とくに第四の，目的語をともなう他動詞の場合が注意される。たとえば（以下の例文は山口による，ただしキリル文字に書きかえた)，

(1) Сарай　зажгло　молнией
納屋を　（それが）焼いた　雷によって　＝納屋が雷によって焼けた

という文では，「納屋」は対格，動詞は過去の中性単数，「雷」は造格の補語で，文が主語を欠いている。山口はこの構文の意味的特徴として「人為を越えた自然現象というニュアンス」（八杉・木村のいう「自然の力によって起る現象」）を指摘し，その不随意的なニュアンスは次のような構文では失われるという。

(2) Молния　зажгла　сарай

	（主格）	焼いた	（対格）	＝雷が納屋を焼いた
(3)	Сарай	загорелся	от	молнии
	（主格）	燃え出した	（原因）	（生格）＝納屋が雷で燃え出した

1のような構文は，本稿のⅡ章で述べる能格現象と結びつけて論じられることがある（たとえば，泉井，1967：79)。しかし，山口は，この構文が「目的語＋動詞述語が第一次のシンタグマを形成し，これを造格に立つ名詞が二次的に修飾するという形式」をもつ点で，能格構文（＝S＋〔O＋V〕）に類似することを認めながらも，その名詞が指示する対象が有生のものではなく，「自然現象，とくにその過程を表すものにすぎず，したがってこれは能格構文の定義に反している」とする。この説明は筆者にはいささか納得しにくいが，古ロシア語に比較すると，対格言語の枠の中で述語の役割を強化し，主語との関係を相対的に弱める方向へと進んできた（述語の役割の強化という点では，「ロシア語は能格あるいは活格言語類型と共通するものを有している」）という山口の論旨からすれば，1のような非人称の構文は活格言語類型との比較で見るべきであるということになる。したがって動詞の自他未分のありかたはもっとも典型的には活格言語に見出されるかもしれない。

さらに，もう一つ別の文法現象として，能格言語のあるものには，可変動詞 labile verb が存在することにも注意しておく必要がある。これは，次の北東カフカース諸語のアヴァール語の例文のように，一つの動詞が意味上の他動詞としても，自動詞としても用いられうるものであるとされ（山口，1995：071)，山口は能格言語の随伴事象 frequentalia に加えている。

(4)	vacas	istakan	bekana	
	（能格）兄弟	（絶対格）コップ	壊した	＝兄弟がコップを壊した
(5)		istakan	bekana	
		（絶対格）		＝コップが壊れた

この現象が，後述のごとく，対格言語にいわゆる自動詞，他動詞の区別を能格言語に措定することは正確さを欠くという主張に論拠を与えるのは明らかである。

なお，例文の3の動詞はいわゆる ся 動詞である。-ся は再帰代名詞の対格（自分自身を）に由来する接尾辞で，動詞は本来再帰相を示している。さきの「人為を越えた自然現象というニュアンスが失われ」るという指摘は，芭蕉の句の横たふを再帰動詞と見る説に考えあわせるとき，まことに興味深い。

5）造化について。『笈の小文』の名高い文，「しかも風雅におけるもの，造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獣に類ス。夷狄

を出，鳥獣を離れて，造化にしたがひ，造化にかへれとなり」（『校本全集』六）の用例について，全集の校注者は「天地万物を創造育化すること，またするもの」として，『列子』（周穆王）の「造化之所始，陰陽之所變者，謂之生，謂之死」（新釈漢文体系二二）を引き，「ただし芭蕉は天地自然というぐらいの意に使う」という。それを誤りというのではないが，この天地自然には人間も含まれていることを見落としてはならない。『荘子』によれば，造化は大冶（大いなる鋳物師）である。「今，一犯人之形，而曰人耳人耳，夫造化者，必以爲不祥之人，今，以天地爲大鑪，以造化爲大冶，惡乎往而不可哉。成然寐，蘧然覺」（大宗師，新釈漢文体系七）。人は造化の一物であり，生死という寤寐の境に置かれている。その人間が万物を花と見，月と思うのは心の修練の賜物に他ならない。そして，人が性を全うし，真を保つなら，その誠は天に通じるにちがいない。万物を懐んで，造化を友とする，という古言もある。「又況夫宮天地，懐萬物，而友造化，含至和，直偶于人形，觀九鑽一，知之所不知，而心未嘗死者乎」（『淮南子』覽冥訓，新釈漢文体系五四）。造化者が風雅の誠を祥とすることは疑いない。芭蕉の思想の根本にあるのは，その信である。そこには，宗教的な態度がなにほどか伺われることは確かである。たとえば，西行は晩年高尾の神護寺でかく物語ったと伝えられる。「我歌を読むは，遙に尋常に異なり。華・郭公・月・雪，都て万物の興に向ひても，凡そ所有相皆是虚妄なる事，眼に遮り耳に満てり。又読み出す所の言句は，皆是真言に非ずや。華を読めども実に華と思ふ事なく，月を詠ずれども実に月と思はず。〔中略〕白日かゝやけば虚空明らかなるに似たり。然れども虚空は本，明らかなる物にも非ず，又色どれる物にも非ず。我又此の虚空の如くなる心の上において，種々の風情を色どると云へども，更に蹤跡なし〔後略〕」（『明恵上人集』岩波文庫）。この詠歌の態度は空観に発するが，筆者の見るところ，文意は，表現は逆ながら，前引の芭蕉のそれに等しい。真空妙有を，真空から把えるか，妙有から把えるかの相異にすぎない。芭蕉は『荘子』を耽読していた延宝の末頃，深川臨川寺で鹿島根本寺の仏頂河南に参禅したとされ（其角「芭蕉翁終焉記」），たとえば，『三冊子』に「ものあらわにいひ出ても，そのものより自然に出る情にあらざれば，物我二つに成りて，その情誠に不至」という「二つ」は明らかに禅の語彙である。しかし，芭蕉の禅を云々してみても得るところはない。宗教的，哲学的語彙としては，造化を押さえておけば，それで十分と思われる。夷狄鳥獣の境界を脱して，造化に随順すること，そして，『おくのほそ道』の松島の下りに，「造化の天工，いづれの人か筆をふるひ，詞を盡さむ」とある，俳諧の言語を究尽することに，誠のすべてが懸かっていたというべきである。付け加えれば，この天工の語について，大漢和辭典が陸游の句を引くのは興味深い。「天工不用翦刀催，山杏溪桃次第開」（新燕詩）。杏桃がおのずから花を咲かせるのは，天工すなわち造化の巧みによる。宣長も『古事記傳』二之巻に「造化は，漢籍に，天地陰陽の運行によりて，萬物の成出るをいへ

り」（『全集』九）と述べている。ローマの詩人ウェルギリウスのいう natura も造化の生成の力を表す語であった。Quippe solo natura subest.（『農耕歌』Ⅱ—49，何といっても大地には／もともとものを生んで成す／力がひそんでいるゆえに。泉井久之助訳）。natura がヨーロッパ諸語に入ってのちに蒙った，意味の近代的な変容はさて措き，その原義（<IE. *gne-, *to give birth*）は「自然」という明治期の訳語にではなく，「造化」のほうにより適合することに注意したい。

6）吉川幸次郎は荒海やの句について，杜甫の七言律詩「夜」の結尾の二行，歩簷倚杖看牛斗，銀漢遙應接鳳城，の「影響」を説いている（『新唐詩選』岩波新書）。影響はなるほど否定できないかもしれないが，芭蕉の佐渡が杜甫にとっての長安に比すべくもないことはただちに明らかである。句の読みをこの「影響」のもとに立てるとき，そこに働くことになるのは，やはり，言語外現実の平板な力にすぎない。森敦も『われもまたおくのほそ道』（講談社文芸文庫）で，杖ニ倚ッテ軒下ノ廊下カラ，アレガ牛星カ斗星カト見ルト，銀漢ガ遙ニ連ナッテイル，鳳城ニ接スルニ違イナイ，と「夜」の二行を訳して，これは筆者の言葉でいえば，隠し味としての杜甫を「飛流百尺」の日光の滝の条における李白と対比しているが，これも「意味の変容」に関する森理論からすれば，洒落のようなものである。しかし，荒海やの句を『おくのほそ道』の作品構造の中にどう位置づけるかという問題がもう一つの課題として残ることはむろんである。それに関連して，素龍清書本（元禄七年四月）に先立つ草稿本は荊口宛書簡の日付の元禄六年四月の末には出来上がっていたことに注意したい。そこには，越後路の条も含まれていた。同年五月六日に江戸を発って彦根に帰藩した許六の筆になる「旅懐狂賦」（五月十五日付）には，芭蕉の旅を叙して，「我翁〔中略〕佐渡に横たふ天の川を見付，云々」という一節が見えるからである（久富，1980）。越後路の本文の推敲の過程で，具体的には，文月や六日も常の夜に似ず，という七夕の句を「荒海や」に付け合わせるに際して，横たふの一語が思いがけぬ意味の深みを露にするに至ったことは推測に難くない。

7）印欧語の能格性の問題は有生名詞の幹母音型主格語尾 -s の特異性に注目することにはじまったが（対格言語では，一般に，主格は無標），ロシアの内容的類型学では，活格言語を能格言語に歴史的に先立つ類型として構想するので，印欧語の活格性が予想されることになる。すなわち -s を活格に由来すると見れば，それが活格動詞の動作主の標示のためにもともと有標であって，不思議はない（クリモフ，1999：132）。ウーレンベックも晩年の論文では（Uhlenbeck, 1948: 73），-s は「他動詞の論理的主語であるのみならず，すべての verbes actifs（行為動詞）の主語でもあるという可能性」に言及している（なお，ここではバスク語の格について，ergative / absolutive ではなく transitif / intransitif を使用）。また，松本（1988）は，印欧語のより古い格組織の痕跡を非幹母音型の曲用に見て，従来再建されてきた格変化を，主格を -ϕ，属格＝能格を -os/-s，対格＝方格 -m と，能格

が有生名詞にも無生名詞にも現れるように組み直し，本文に後述のシルヴァースティーンの名詞句階層が措定する普遍性に違反しないという検証を加えているが，結論部では，印欧語は能格型というより動格型（＝活格言語）として性格づけられるという見通しを述べている。松本の同年の論文（1988b）はこの見通しを，印欧語の動詞活用組織を動態（活格）活用と静態（不活格）活用の視点から検討して，さらに詳しく述べたものである。クリモフは，活格言語類型の歴史的変化に，活格動詞と不活格動詞との対立の弱体化にともなう能格言語化と，他動詞と自動詞の顕在化にともなう主格言語化（対格言語化）の二つの過程を想定し，「これ以外の進化系統は経験的に観察されない」としている（153）。

8）Seely（1977：194-196）によれば，ergativity に対する西ヨーロッパの関心は1966年の Fillmore の論文によって高まるが，それは能格を使役性とする misleading な解釈で，それは Lyons（『理論言語学』1968）その他にも見え，能格概念の拡大（あるいは，逸脱）がかく進んでゆく状況に対して，1970年には，ergative を言語学の用語集から除くという発言も出ているという。

9）ディクソンは一貫して S（ubject），A（gent），O（bject）をもちい，O を P（atient）にかえないが，それは単なる用語の問題ではなく（Comrie, 1981：104-105），能格言語には，1）対格言語の主語，目的語という概念が果して適用できるか（柴谷，1986：75-76），いいかえれば，2）自動詞，他動詞の区別が認められるかという基本的な問題である。これは能格構文においてはさほど顕在化しないともいえるが，活格言語の場合には，動詞が活格動詞（行為動詞）と不活格動詞（状態動詞）に区別されるので（クリモフ，1999：68），はっきり表面に出てくることになる。この区別は active verb / inactive verb として北米インディアン諸語では早くに知られていたもので，サピアは1916年のウーレンベックの論文の有名な書評で，動詞の区別を transitive / intransitive にかえて active / inactive とし，inactive ＝static verb を，意味上の主語が他動詞の意味上の目的語になる自動詞に当てている（Sapir, 1917：85）。たとえばスー語族のラコタ語では，名詞は格標示を欠いているが，代名詞的な人称接辞（一人称単数と二人称単複）の区別が，次の例文の wa- と ma- のように，意味上の自動詞の構文を二つに区別する（Dahlstrom, 1983：41）。（2）の動詞 hãska が状態動詞であって，クリモフに従えば，ダコタ語（ラコタ＝ティートン・ダコタ）は活格構造の基準言語の一つである。

(1)	wa-	lowã			
	A私	歌う			＝私は歌う
(2)	ma-	hãska			
	P私	背が高い			＝私は背が高い
(3)	ma-	ya-	gnayã-	pi	

P私　　A君　騙す　　（複数）　＝君たちは私を騙した

英語圏では，この文法現象は自動詞分裂 split intransitivity と呼ばれ (Merlan, 1985)，活格言語という用語は使われない。ディクソンは，動詞の意味的性質が条件づける split の一つである，split-S system とする。それは対格，能格に並ぶ，言語のタイプと考えられているが，むしろ対格と能格の混合型と見なされ，活格言語の場合のような歴史的先行性はおそらく認められていない。ディクソンは言語進化の断続平衡モデルの提唱者であり (Dixon, 1997: 67-96)，『能格性』のある箇所の注で，活格＞能格＞対格という言語タイプの unilinear な変化（註６）参照）についてのクリモフの挙証に反論している (Dixon, 1994 : 185-186)。

split-S system は S を Sa と So に分割する。これを図示すれば，

他動詞 →	A	O
自動詞 →	Sa	So

さて，この split-S のタイプの言語について，ディクソンは統語的な原始要素が A，Oの二つだけとも考えられるという意味のことを述べている。この文章は含みが微妙なので，原文を引用したい。

> It might be thought that a split-S language could be described without recourse to an S category, that instead of what I posit as the universal set of syntactic primitives, S, A and O, we should perhaps use four primitives for a split-S language: Sa, So, A and O. Or perhaps just two, A and O, with the proviso that a transitive clause involves A and O and that there are two kinds of intransitive clause, one with just A and the other with just O. (Dixon, 1994: 75)

これがあくまで自動詞，他動詞の区別を措定するということなのか，どうか，筆者にはにわかに判断できない。ディクソンはA，Oの格の名前をつけあぐんでいるが，active / inactive は考慮の外である。ともあれ，『能格性』の文献表には，クリモフの1977年の著書（＝クリモフ，1999の原書）はあがっていない。

付け加えれば，上の図から他動詞，自動詞の指示をとりされば，そのまま，活格言語の図となる。左の枠が活格動詞，右のそれが不活格動詞である。

10）普遍性3は以下の通り。「もしある言語が有生性階層の高い名詞句で能格標示をもつならば，それより低い名詞句は必ず能格を標示する。また逆に，ある言語が有生性階層の低い名詞句で対格標示をもつならば，それより高い名詞句は必ず対格を標示する。」

11）能格言語の分布を，松本（2000）によって見ておくなら，能格型標示は言語地理学にいう残存型の分布を示し，とくにユーラシア大陸の内陸部では，対格型格標示をもつ，中心分布圏の言語と鮮明に区分されるという。両者は複式人称標示（動詞活用の中に主語以外の項をも標示する）と単式人称標示の対立ともあいまって，旧，新の言語層をなし，新しい層である対格言語の形成は，印欧語を含む，それぞれの語族の祖語の推定年代の一致から見て，いまから6000年前以降のこととされる。旧層に属する能格言語の主なものをあげれば，バスク語，コーカサス諸語，インダス川上流のブルシャスキー語，チベット・ビルマ諸語，イェニセイ川中流のケット語，シベリアのチュクチ・カムチャッカ諸語。また，ユーラシアから移動した，エスキモー・アリュート語，北米のチヌーク語など少数のもの，中米のマヤ諸語，南米インディアン諸語のいくつかの語族。さらに，オーストラリア諸語，パプア諸語。古代語では，たとえばシュメール語も能格型である。付載の表および分布図参照。なお，ここでは，動格型（活格型）の格標示がひとまず考慮外とされていることに注意したい。

松本氏は，興味深いことに，ペデルセンが1924年に提唱して以来根強い流れになっている Nostratian Languages（← L. *nostras*）の仮説（Pedersen, 1959: 338），ユーラシア内陸部のセム，インド・ヨーロッパ，ウラル，アルタイを一つの語族にまとめる仮説が決して荒唐無稽ではないという強い示唆がえられると述べた上で，結論として，「新人がアフリカを出て世界各地に拡散した後期旧石器時代」における言語の系統関係について，第一段階の分岐をアフロ・ユーラシア大陸とオセアニアのニューギニア・オーストラリア大陸とのそれに，第二段階の分岐をアフロ・ユーラシア大陸における内陸言語圏と太平洋沿岸言語圏とのそれにもとめている。

12）近年，霊長類学，脳神経科学，認知心理学，認知言語学，言語人類学，等々，いずれも進化論を基本線に置く諸学の急速な進展にともなって，制度としての家族と社会の起源，言語的分節以前の認知とシンボルの機能，コミュニケーションに先行す

る，世界の範疇化の原理としての分節言語とその起源，言語の神経的基盤，等々の問題について新しい知見が次々に出ているが，それらについては，次稿の活格言語の記述のあとで検討したい。

参照文献

〔歌謡と狩猟採集民〕

Berndt, R.M. & C.H. 1992. *The World of the First Australians.* Aboriginal Studies Press.

Bowra, C.M. 1962. *Primitive Song.* The World Publishing Company.

Strehlow, T.G.H. 1933. Ankotarinja. An Aranda Myth. *Oceania.* IV-2. 187-200.

Strehlow, T.G.H. 1947. *Aranda Traditions.* Melbourne University Press.

Strehlow, T.G.H. 1950. *An Australian Viewpoint.* The Hawthorn Press.

Strehlow, T.G.H. 1955. Australian Aboriginal Songs. *International Folk Music Journal.* VII. 37-40.

Strehlow, T.G.H. 1971. *Songs of Central Australia.* Angus and Robertson.

Strehlow, T.G.H. 1978. *Central Australian Religion-Personal Monototemism in a Polytotemic Community.* Australian Association for the Study of Religions.

スチュアートヘンリ. ed. 2003. 『「野生」の誕生一未開イメージの歴史』世界思想社.

〔芭蕉〕

安東次男. 1996. 『おくのほそ道』岩波書店.

頴原退蔵. 1949. 『名句評釈』『頴原退蔵著作集』第六巻，中央公論社，所収.

荻原井泉水. 1956. 『奥の細道ノート』新潮文庫.

加藤楸邨. 1975. 『芭蕉全句』下巻，筑摩書房.

金田一京助. 1940. 「文学と文法」『金田一京助全集』第三巻，三省堂，所収.

幸田露伴. 1956. 『芭蕉入門』新潮文庫.

久富哲雄. 1980. 『おくのほそ道全訳注』講談社学術文庫.

堀切実. 2003. 『「おくのほそ道」解釈事典』東京堂出版.

森重敏. 1975. 『発句と和歌一句法論の試み』笠間書院.

山本健吉. 1959. 『芭蕉』新潮文庫.

〔言語思想史〕

Aarsleff, H. 1982. *From Locke to Saussure-Essays on the Study of Language and Intellectual History.* University of Minnesota Press.

Cassirer, E. 1985. *Symbol, Technik, Sprache.* Felix Meiner Verlag.

De Mauro, T. 1965. *Introduzione alla semantica.* Editori Laterza. (邦訳. 1977.

竹内孝次訳．朝日出版社）

De Mauro, T. 1967. *Ludwig Wittgenstein-His Place in the Development of Semantics.* D. Reidel Publishing Company.

Harris R. & Taylor T.J. 1989. *Landmarks in Linguistic Thought-The Western Tradition from Socrate to Saussure.* Routledge.（邦訳．1997．斉藤伸治・滝沢直宏訳．大修館書店）

Malinowski, B. 1923. The Problem of Meaning in Primitive Language. In: Ogden C.K. & Richards, I.A. *The Meaning of Meaning.* Routledge & Kegan Paul LTD. 296-336.（邦訳．1967．石橋幸太郎訳．新泉社）

〔言語学〕

Benveniste, E. 1966. *Problèmes de linguistique générale.* Gallimard.（邦訳．1983．岸本通夫監訳．みすず書房）

Comrie B. 1978. Ergativity. In: Lehmann, P.L. ed. *Syntactic Typology.* University of Texas Press. 329-394.

Comrie, B. 1981. *Language Universals and Linguistic Typology.* Basil Blackwell.（邦訳．1992．松本克己・山本秀樹訳．ひつじ書房）

Dahlstrom, A. 1983. Agent-Patient Languages and Split Case Marking Systems. *Proceedings of the Annual Meetings of the Berkley Linguistics Society.* 9. 37-46.

Dixon, R.M.W. 1972. *The Dyirbal Language of North Queensland.* Cambridge University Press.

Dixon, R.M.W. 1979. Ergativity. *Language.* 55. 59-138.

Dixon, R.M.W. 1980. *The Languages of Australia.* Cambridge University Press.

Dixon, R.M.W. 1994. *Ergativity.* Cambridge University Press.

Dixon, R.M.W. 1997. *The rise and fall of languages.* Cambridge University Press.（邦訳．2001．大角翠訳．岩波新書）

Dixon, R.M.W. 2002. *Australian Languages.* Cambridge University Press.

Greenberg, J.H. 1963. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In: *On Language-Selected Writings of Joseph H. Greenberg.* Stanford University Press. 1990. 40-70.

Merlan, F. 1985. Split intransitivity: functional oppositions in intransitive inflection. In: Nichols J. & Woodbury, A.C. ed. *Grammar inside and outside the clause.* Cambridge University Press.

Pedersen, H. 1959. *The Discovery of Language-Linguistic Science in the Nineteenth Century.* Indiana University Press.

Ramat, P. 1999. Typological Comparison: Toward a Historical Perspective. In: Shibatani, M. & Bynon, Th. ed. *Approaches to Language Typology*. Oxford University Press.

Sapir, E. 1917. Review of 'Het Passieve Karakter van het Verbum Transitivum of van het Verbum Actionis in Talen van Noord-Amerika' by C.C. Uhlenbeck. *International Journal of American Linguistics*. 1. 82-86.

Sapir, E. 1921. *Language*. Harcourt Brace & Company. (邦訳. 1957. 泉井久之助訳. 紀伊国屋書店)

Seely, J. 1977. An Ergative Historiography. *Historiographia Linguistica*. IV-2. 191-206.

Silverstein, M. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In: Dixon. ed. *Grammatical Categories in Australian Languages*. Australian Institute of Aboriginal Studies. 112-171.

Uhlenbeck. C.C. 1948. La langue Basque et la linguistique générale. *Lingua*. 1. 59-76.

クリモフ, G.A. 1999. 『新しい言語類型学—活格構造言語とは何か』石田修一訳, 三省堂.

泉井久之助. 1967. 『言語の構造』紀伊国屋書店.

柴谷方良・角田太作. 1982. 「言語類型論の動向」『言語』11：4. 100-108.

柴谷方良. 1986. 「能格性をめぐる諸問題」『言語研究』90. 75-96.

松本克己. 1986. 「能格性に関する若干の普遍特性」『言語研究』90. 169-190.

松本克己. 1988. 「印欧語の名詞形態法の起源」『言語』17-6. 86-93.

松本克己. 1988b. 「印欧語における能格性の問題」『東京大学言語学論集 '88』1-19.

松本克己. 2000. 「世界諸言語の類型地理と言語の遠い親族関係」『言語類型地理論シンポジウム論文集』青山学院大学. 96-135.

山口巌. 1995. 『類型学序説—ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』京都大学学術出版会.

山口巌. 1998. 『ことばの構造とことばの論理』日本古代ロシア研究会.